

1 研究主題 「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図る教育の充実に向けて」

2 研究の具体

令和4年3月に『幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)』及びその参考資料(初版)が策定された。幼保小の架け橋期(0~18歳の学びの連続性に配慮しつつ、5歳児~小学校1年生の2年間を対象)にふさわしい主体的・対話的で深い学びの実現を図り、一人一人の多様性に配慮した上で全ての子どもに学びや生活の基盤が育まれるよう、各地域や施設の創意工夫を生かした取組の充実が求められている。

<本県の取組>

(1) 幼児教育長期研修

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続に向けた連携の推進を図るため、小学校教諭が近隣の幼稚園等において、1年間幼児期の教育に携わり理解を深めることを目的とし、平成22年度から実施している。派遣教員は、コーディネーター役となって幼児と児童の交流活動及び教員等間の研修の計画を立て、実践につなぐとともに、接続期(5歳児後期・1年生入学期)の指導の工夫及び発達や学びをつなぐ教育課程の編成や指導計画の作成についても研究を進め、1年間の研修を終え小学校に戻ってからも、引き続き実践的研究を行っている。

(2) 幼・保・こ・小理解研修会

幼稚園教員、保育士、保育教諭、小学校教員が相互の教育について理解を図るとともに、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方を探るために必要な協議を行い、教員の指導力の向上に資することを目的として実施している。「幼児教育と小学校教育の円滑な接続について考える~幼児・児童の具体的な姿や幼児教育長期研修教員の実践から~」等のテーマで実践発表や協議を行っており、令和6年度の協議では「長期研修教員の実践発表から学んだことや考えたこと」「子どもの発想を生かした遊びや行事、授業や活動等」について交流しながら「学びをつなぐ」ことについて考えを深めていった。

【幼児教育長期研修 派遣教員による実践発表】

幼児教育長期研修で学んでいること

坂出市立川津小学校 中島 雅美 (研修園：坂出市立川津こども園)

○園での遊びや生活から ~遊びの中で学ぶということ~

<事例1>4歳児「キャラクターになりきる」ための工夫 ~自分なりのイメージを膨らませて~

K児	S児
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 白いトイレットペーパーの芯を選んで</li> <li>・ 色鉛筆で、外側だけでなく内側にも色を塗って</li> <li>・ 紐の長さや結び目の位置にもこだわって</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ラップの芯を選んで</li> <li>・ ペンで濃く色を塗って</li> <li>・ 芯の位置を固定させるためにセロテープを使って</li> <li>・ 4色の紐を髪の毛に飾って</li> </ul>

試行錯誤しながら夢中になって遊んでいる。同じ遊びをしているようでもK児とS児のアプローチの仕方は異なる。この場面にも「遊びの中で学ぶ」姿があり、「育まれている資質・能力」を読み取ることができる。

<事例2>2歳児「ダンゴムシ」に夢中 ~小学校の学びへとつながっていく経験~



- ・ 異年齢児や保育者、友達がダンゴムシに触る姿を見て、興味をもつ
- ・ 心が動き、触ってみる(ダンゴムシは、2歳児の興味・関心、指先の動きの発達にぴったり)
- ・ だんだん慣れて、愛着をもつ
- ・ 保育者が作ったダンゴムシ迷路の中に入れて楽しむ
- ・ 掴むときの力加減を学ぶ
- ・ えさをあげて育てようとする
- ・ ダンゴムシがいそうな場所がわかり、探すようになる

実体験の中での気付き  
→ もっと知りたい!  
~してみたい!

○交流活動の工夫 ~幼児と児童がともに活動する交流へ~ 「あきであそぼう こうりゅうかい」(1年 生活科)

保育者と小学校教員による事前打ち合わせについては、幼児教育長期研修派遣教員がコーディネーターとなり、短時間で複数回行った。年長児と1年生が話し合い、互いのアイデアや表現に触れながら、一緒におもちや作りを楽しむことができるような活動内容にしたいと考え、単元計画のうちどの時間を交流の時間とするかについても検討を行った。

交流当日は、幼児と児童と一緒に遊ぶ中で多くの発想が生まれた。また、互いのよいところを知るきっかけにもなった。工夫すること、表現することの楽しさを感じて、一緒に試してみたり自らの考えをどんどん伝え合ったりする幼児・児童の姿も見られた。

事前・事後の協議を含め、交流活動は互いの教育・保育や援助で大切にしていることや、子どもの学びや成長の過程を知ることができるよい機会である。今後も、年長児の小学校生活に対するイメージが楽しいものになるような体験活動を取り入れるなど、子ども同士の交流活動のあり方を工夫していくとともに、教職員同士の交流を通して、育てたい子どもの姿についての共通理解を進めていきたい。